

第4回国際観光都市としての機能整備に関する研究会
議事要旨

1 日時 平成30年1月30日(火) 午後1時30分から午後4時30分まで

2 内容 空港島及び対岸部の視察及び会議開催

3 出席者(敬称略・五十音順)

【委員】

内田 俊宏(中京大学経済学部 客員教授)

黒田 達朗(名古屋大学大学院環境学研究科 教授)

林 大策(愛知淑徳大学交流文化学部 教授)

水尾 衣里(名城大学人間学部 教授)

村上 心(椋山女学園大学生生活科学部 教授)

※ 井澤知且委員は欠席

【オブザーバー】

常滑商工会議所

牧野克則会頭、澤田研一副会頭始め 22名

4 会議の議題

国際観光都市に向けた地元の取組等について

5 会議の議事概要

常滑市、中部国際空港(株)、イオンモール常滑が資料について説明した。その後、常滑商工会議所会員から発言があり、最後に委員が意見を述べた。

主な発言内容は次のとおり。

第4回研究会における主な発言

【各委員の発言】

(内田委員)

- セントレアの利用者数も含めてインバウンドは全国的に増加傾向であり、昇龍道の宿泊者数の延べ人数は数値目標を達成しているが、国、地域別でみていくと、中国人観光客の割合が半分以上を占める。成田から入って関空から出るゴールデンルート上で、愛知県には宿泊するだけの訪日客もかなりいるので、まだまだ観光客を伸ばすポテンシャルがある。
- 国際観光収入でみると、シンガポールやマカオなどのIRを含む都市は、面積は小さいが国際観光収入で比較すると上位にきている。訪日客のうちアジアの富裕層の取り込みには日本国内にもIRは必要だと思う。
- 中部でのIRの候補地としては、常滑が有力。国際展示場のコンセッション優先交渉権者が外資系のGL eventsに決まったということもあり、海外からのMICE需要も見込める。VIP客は、会議日程の終了後に高額のお金を使うことが多いので、国際空港との相乗効果で、愛知県内の1人あたりの観光収入を増やせる可能性はある。
- IRには治安面やギャンブル依存症などの懸念材料はあるが、常滑市はすでに競艇場の運営もしており、他の都市よりはノウハウがある。国際空港を有し、セントレアの便数も増加傾向にある。さらに、大型クルーズ船が着岸できる岸壁の整備も検討に入っており、条件面では絶好のロケーションといえる。
- 懸念される点は、ものづくり文化の影響が大きい愛知県で、堅実な県民性に対してどのように理解を求めていくかという点。ポテンシャルが高いことは間違いのないが、地元の理解や、経済的な効果を共有する雰囲気醸成は重要。
- 統合型リゾートの利用者が訪日客のみならず、地元の人達も頻繁に利用するということになると、域内所得が海外など域外に流出してしまう懸念もある。運営面など全体の仕組みを考える上でそういった視点も重要。

(林委員)

- CHITA CATプロジェクトのような観光事業者以外の事業者のネットワークこそ観光コンテンツが生まれるポータルやインキュベーションの組織になる。こうした連携はどんどん進めていただくと良い。
- 常滑には様々なプロジェクトがあって、雇用も増え、賃金も上がり、基本的には市民の住環境は景氣的に良い方向に進んでいく中で、市民の人たちは常滑の素晴らしいポテンシャルである食や自然、海、地場産業などを活かしていく責務がある。急須でのおもてなしなど、お金をとりながら、他では経験できないような価値や満足度を提供できるところまで高めていただきたい。
- この地に縁のない方や、訪日外国人が地元の発酵文化について体験することは難しい。そうした機会を提供できるよう、後々CHITA CATなどをベースにフォロー

できる仕組みが作れると良い。常滑はこれだけポテンシャルがあるので、この地がゲートウェイになってやっていくんだ、という責務をもって進めていただきたい。

(水尾委員)

- この地域が国際観光都市として世界の人に受け入れてもらうために何が必要か。こういう議論ができることは千載一遇のチャンス。I Rにカジノを含めるか含めないかという考え方は人それぞれあるし、結果的にI Rに結びつかなかったとしても、国際都市に相応しいハード整備を目指して、東京オリンピック、リニアを見据えて、これからの未来に対して、この地域がどんなコンセプトを持って発展していくのかという議論ができると良い。
- クルーズ船のハード整備が名古屋は不十分だが、大型船が多く入る。常滑はそうしたクルーズ船客のオプションツアーとして最適地だと思うが、誰も行かない。知多半島全体が1つのリゾートとしてのポテンシャルをもっていて、歴史文化、美食、自然も豊かだし新しい施設もどんどん出来てきているので、その中心として常滑がイニシアチブをとって、存在感ある地域になっていただきたい。
- 海外の人にとってここは無名の地。クルーズ船客や空港利用者などをしっかりキャッチできるような情報発信をもっとやっていくべき。
- 様々な施設等が出来てきているが、デザインがばらばらで、1つ1つは見応えがあるが、軸となるデザインコンセプトが欠落している。空港を中心に街全体が新たに作られたエリアとして、カッコいい、統一感があると思ってもらえるような核となるデザインコンセプトを議論されてはどうか。

(村上委員)

- 常滑の1000年の素晴らしい伝統と新しい変化をどのように融合させていくのか、常滑の皆さんに考えていただく必要がある。
- やきもの散歩道を始め、常滑市全体の景観や街並をみていると、もう少し残すべきものをしっかり残し、新しくつくるものはデザインして一生懸命つくるということも大切。これは数十年、百年かかる話だが、そうした方向性をしっかりと議論し、スタートできるといい。
- ここにビジネスチャンスが訪れると、国内外の事業者が入ってくる。そのときに、そういう方々を受け入れたり、競合したりという準備も必要。
- CHITA CAT の取組は大変すばらしい。企業や役所だけではなく、市民やNPOの方々も巻き込んだ組織に発展していけるといい。また、CHITA CAT以外にもそうした動きが出てきて、誰が主体となって、所有し、運用してリスクをとってくのかということがクリアになっていく仕組みがオープンに議論できるといい。
- ケーブルテレビはコンテンツ作るという意味では大変ノウハウを持っており、素晴らしい役割を果たす。テレビ以外のメディアの活用については、ぜひケーブルテレビが主導して、国内外への発信を試みる事業ができるといい。

(黒田座長)

- CHITA CAT など、地元では大変熱心な取り組みをされているということを改めて感じた。
- 空港利用者はすぐ名鉄電車に乗ってしまい、常滑は降りて見る機会が多くはない。常滑のやきもの散歩道は重要な観光資源だが、意外に国内でもあまり知られていないと思うので、玄関口としてだけでなく、常滑から知多半島を周遊するような機会を増やしていけると良い。
- 東京オリンピックの開催中は、ビッグサイトや幕張メッセが使えなくなる。県の方もそれに合わせて展示場の整備スケジュールを組み込まれたと思うが、そのときが、地元にとってもビッグチャンス。それを見越して準備を進めていただきたい。
- 年内にもう1回開催させていただき、意見の集約をしていきたい。

【常滑商工会議所からの意見概要】

(常滑商工会議所会員)

- 地元とともに成長してきた企業の立場から、『伝統ある常滑焼』と『自社のセラミック製品』をアイデンティティとして世界にPRし、県の国際観光都市づくりの推進や地元と連携したインバウンドの取組に貢献していきたい。
- ケーブルテレビ網を活用して、国際展示場を含め、セントレア地区、常滑地区から中部地域のものづくりを国内外に発信していきたい。
- 急須を始めとする常滑の焼き物を通じて、文化交流や新たなビジネスチャンス、おもてなしの提供につなげていきたい。
- 常滑の来訪者を空港島で完結させるのではなく常滑や知多半島に導く必要がある。常滑の観光魅力を高めるため、観光客の周遊性と利便性に配慮した無料周遊バスの導入をお願いしたい。
- 国際観光を振興するためには、ここにしかない歴史ある焼き物の街らしい景観保全は重要。また、常滑、知多半島の価値の情報発信や、回遊施策が必要。
- 常滑競艇は、市の事業に大きな支援となってきた。今回の計画でも、特に福祉の面で色々な事業への支援体制を強化してほしい。

(牧野会頭)

- 将来的に空港島の駐車場が逼迫してくるので、対岸部も含めてパーク&ライドを利用した駐車場整備計画を検討していくことは重要課題の1つ。最先端のセンシング・知的情報処理により、人・自動車の流れを円滑化する駐車場システムの高度化や、大型バスによる自動走行などで実現できるといい。
- 中部臨空都市自体を、情報科学技術や先端技術を活用し、人材の育成も視野に入れたモデル未来都市として構築することで国内外の人にアピールしていくことが課題。併せて、電動自動車など、この地域の未来を担う最先端技術を紹介し、楽しむことができる体験型の「未来型技術ミュージアム」を構想していくことも、国際観光都市の目玉になるのではないかな。
- 企業庁の空港島及び対岸部の未分譲用地、国際展示場に隣接する多目的利用地の有効活用、新たな用地の造成の検討も必要と考える。